研究成果の詳細

所属機関　山梨英和大学

職名・氏名　専任講師　大井奈美

下記では、研究成果の概要書に記した研究の論点について、それぞれその詳細を説明します。その際、項目ごとに、いかに具体的に研究成果を発表したかについても付言します（予定を含む）。

(1) 俳句の「配合」とその時間性をめぐるメディア論的起源——季語の伝統を中心とした作品構成

●セレンディピティ

セレンディピティとは、「意図せぬ偶然の出会い」を意味する言葉で、俳句の言葉の組み合わせや作句の際に注目されてきた概念である。俳句の素材となる対象との出会いや、詩句のひらめきに対して、意図的な言語操作のみが重要な役割を果たすわけではないのである。

セレンディピティについては、俳人の相子智恵などによって早くから注目され、論じられてきた。「場」における偶然に根ざした俳句表現という観点が、注目されてきたのである。それは、たとえば英国の哲学者ロックなどの西洋近代の自由な個人という発想に根ざした表現とは異なるもので、だからこそ俳句や連句などの実践は20世紀初頭から世界的に注目されてきた。

それら初期の詩の実践もとりあげつつ、俳句が可能にするあたらしい自由のあり方について考察した。そのことが、俳句の「配合」形式といかにかかわっているのかについても、おもな研究課題として分析した。

●俳句における恋の主題

芭蕉の時代から、俳句において恋というテーマは重要な位置付けを有してきた。それは、恋がセレンディピティの典型的な事例であるからだ。人に対する恋のみならず、物に対しても恋と呼べるような出会いと交流があり、それが作品に描かれてきた。そうした出会いは、俳句の「配合」構造を考えるうえで重要である。

配合構造について考えることは、俳句の切れについて再考することでもある。本研究項目では、切れの機能分析を作品に即して行った。

ここではまず、飯田龍太（1920-2007）の作品をとりあげることにする。この作品には、休止された型の特質をあきらかにみてとれると思われるからだ。

春の鳶寄りわかれては高みつつ　　飯田龍太

まずはこの作品を読み解いてみたい。この俳句には、「春の鳶（とび）」のあとに弱い切れがある。季語の「春」が非常に効果的である。夏でも秋でも冬でもない、駘蕩とした春の鳶だからこそ、上昇していく鳶の優雅でのびやかな動きが鮮やかにきわだっているのである。春の鳶のあとの切れが春の鳶という言い切りを可能にしてリズムを区切ることによって、春の鳶の停止ではなく、逆説的に、鳶の動きのキレが増していると言ってもよい。

この俳句には、鳶の一連の動きだけが描かれている。しかし実は、この作品の魅力の中心は、二羽の鳶が人間たちの比喩になっていることだろう。つまり、上昇する二羽の鳶は、互いに成長させられるような大切な人間関係の比喩になっていると考えられるのである。一般的に、俳句では、著者の思想や感情などの主要なテーマや真に言いたいメッセージが直接的に表現されつくされることはない。むしろ言わないことによって、表現されなかった内容をかえって強く印象づけるのである。いわゆる省略の技法である。龍太の作品の読者もまた、直接的には書かれていないものの、自分と大切なだれかとの関係を思って、あたかも鳶と自分たちとが作品のなかで成り代わるように感じることだろう。

このようにして、休止された型としての切れは、動作のキレを増すこと、すなわち動きの鮮やかな描写を助けることによって、切れそのものに象徴の力を与える機能を果たしていると考えられる。切れの省略の技法によって、人間と鳶との象徴的な同一化・連続性が実現している。したがって、俳句を詠むことは、鳶にかぎらず、他者にたいして同化・共感していくような想像力を養う機会になり得るのである。

つぎに、龍太と同時代を生きた俳人・藤田湘子（しょうし）（1926-2005）の作品をとりあげたい。

音楽を降らしめよ夥しき蝶に　藤田湘子

この作品の中心、すなわち「音楽を降らしめよ」と「夥（おびただ）しき蝶に」とのあいだには、非常に強い切れがある。ここで切れは、湘子による一種の内省としてはたらいているようだ。

私たちの人生に目を向ければ、不意におこった挫折や失敗によって不本意かつ強制的に人生に区切りが与えられ、変化させられてしまうことがある。そのようなとき大切なのは、挫折や失敗の経験に何らかの意味を与えようとする内省の時間だろう。湘子の俳句も同様の内省という特質をもっている。実際、この作品の主題は、広島の原子爆弾の犠牲者たちのために祈ることである。したがって一群の蝶とはそのような犠牲者たちの省庁であり、美しい天上の旋律が彼らの魂を癒してくれるようにと湘子は祈っているのである。

ここで切れは、したがって、俳句の作者と読者にたいして、挫折のようななんらかの経験やできごとにたいしてあたらしい意義を付与しようとするのを助けてくれる。そのようにして、切れは私たちを断絶させるのではなくむしろ開放させるのである。その結果、できごとや経験や他者にたいする責任や連帯感、かかわりを私たちに養うきっかけを与えてくれるのである。

以上、切れの機能という点から、二つの俳句作品を分析してきた。切れには、同一化と開放という二つの機能があり、結果として、私たちが他者やできごとにたいして想像や責

任をもつようになるきっかけを与えてくれていることがわかった。
この切れの機能に即して、俳句における恋の主題とさらに関係づけつつ、考察を深めることが求められる。

研究の成果をいかに発表したか

・米国シカゴでの研究発表（「経験的文学・メディア学会」への参加と研究発表）。発表タイトルの日本語訳はつぎのとおりである。
「「休止された型」概念による俳句分析の試み——詩における参入（コミットメント）の重要性」

・本項目における研究成果は、英語論文にまとめ、ドイツのシュプリンガー社から刊行予定の『経験的文学研究をめぐる叢書』に寄稿する（予定）。現在執筆中。

(2) アナログ・メディア時代における俳句の「配合」の変化——リアルタイム性の前景化

研究成果概要では、本項目についてつぎのように記載した。「写真や映画などの登場以降、「配合」をそれほど重視しない散文形式による作品が多数生みだされてきた。写真などのアナログ・メディアが、当代の俳人たちの認識枠組をいかに更新したのかについて、考察を加える」。
そうした散文的な作品の典型例として、夏目漱石などのいわゆる「文人俳句」について具体的にとりあげた。漱石の俳句にはいわゆる「切れ」があまりみられないという点が、飯田龍太などの俳人によって指摘されてきた。切れがない、つまり、小説のような散文的俳句が多いのである。そのため文人俳句には、意味の余白部分にたいする読者の想像力を喚起するというよりむしろ、小説や漢詩の文体に連続するような、描きつくす技法が用いられていることついて考察した。
この論点については、飯田龍太による漱石批評についてもとりあげつつ、2016年9月に山梨英和大学で開催された公開講座（県民コミュニティカレッジ）にて広く県民のみなさんに紹介し、ともに考えた。
なお、『我輩は猫である』などの漱石の小説作品は、ユーモアの観点からしばしば分析されている。俳句においても、「共感と笑い」というテーマは、俳句にとっても非常に重要なものとして評価されてきた。単なる挨拶という性質ばかりではなく、俳句を介して共に笑い、共感することは、俳句のいかなる構造によっているのか。この問いについてさらなる考察が必要であるが、意外な二つの詩句の「配合」によるものというよりむしろ、言葉遊びの要素が強いこともある散文的な俳句構造のほうが、「笑い」を喚起しやすいのではないか。この作業仮説のもとで現在も研究を遂行している。
俳句における笑いの主題のほか、俳句における「共感覚」というべき体験についても考察した。それは、俳句というテクストを介して、豊かなイメージや映像が読者のうちに湧き上がる体験である。そのような共感覚を実現する作品として、飯田蛇笏・龍太の

作品に注目した。二人の俳人の特徴は、山梨の自然豊かな環境のなかで作句した点にある。

二人の作品がどのような環境で生まれ、また二人がいかに活動していたのかについて調査するために、飯田蛇笏邸への訪問と、龍太の子息にたいするインタビュー調査を行った（2016 年 11 月 11 日）。本項目の最後に、調査の際に撮影したいくつかの写真を掲載する。

●俳句におけるエロティシズムの主題

ここでいうエロティシズムとは、人間同士の性的コミュニケーションのみを必ずしも意味していない。例えば蕪村の「稲妻や浪もて結へる秋津島」という作品が天地のまぐわいという観点から分析されることがあるように、二つの詩句で表される対象同士が自らの境界をこえて深く交流することについて、エロティシズムをめぐる先行研究をもとにして考察した。

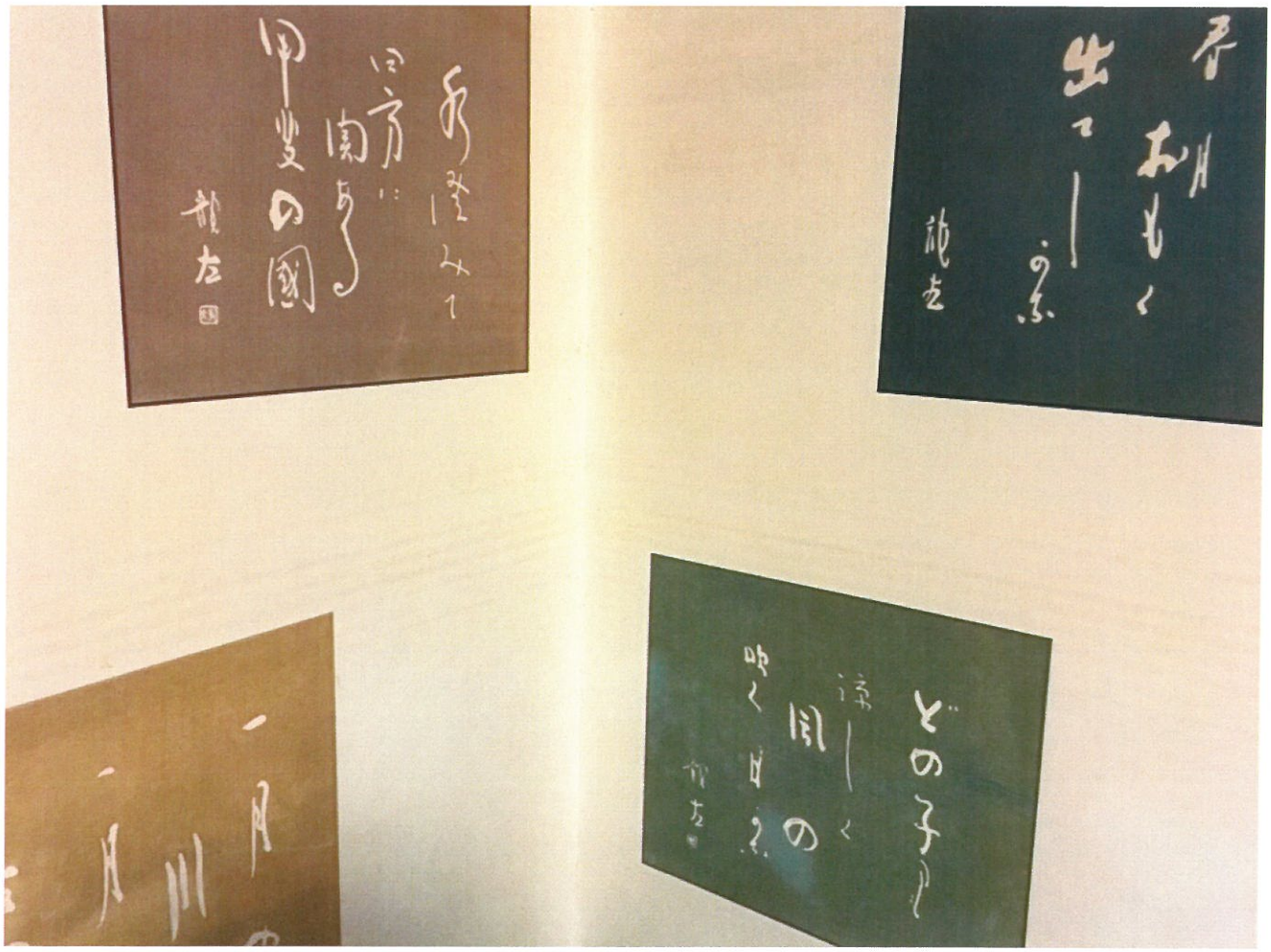
ここでは、フランスの思想家ロラン・バルトの俳句論や、ジョルジュ・バタイユによるエロティシズム論を参考にした。相反する二つの要素のコミュニケーションという観点から、俳句が可能にする体験を分析するためである。

しかしこの俳句の性質については、十分なアウトプットがまだできていない。今後さらなる調査・研究を行う必要がある。

研究の成果をいかに発表したか

・「漱石の俳句とその周辺」と題した、大学での県民公開講座（県民コミュニティカレッジ）を開催した（開催日時　２０１６年１０月５日（水）１３時から１４時３０分）。

・飯田蛇笏邸への訪問とインタビュー調査を行った。飯田邸で定期的に開催されている文化論講座への講師としての参加についても相談した（ただし参加時期は未定）。下記の写真は、蛇笏邸訪問時のものである（蛇笏の書斎、龍太の作品の屏風、蛇笏邸玄関など）。



(3) デジタル・メディア時代における（ネット）俳句の「配合」——時間のパラドキシカルな統合

本研究項目では、インターネット俳句をふくむ「マイクロ・ポエトリー」をおもな題材にしつつ、現代デジタル社会におけるデータと詩との違いについて考察することを目的に研究を遂行した。その際の論点は、研究成果概要書にも記載したとおり、つぎの二つであった。

●失敗や欠点の肯定

マイクロ・ポエトリーとは、デジタル・メディア上の「短詩」であり、俳句の現代的な展開の一つである。マイクロ・ポエトリーはツイッターなどのSNS上で世界的に流行している。マイクロ・ポエトリーにおいては、人生における失敗や人の欠点が主題とされることがとても多い。失敗や欠点という人間的な限界をあえて詠みこむことで、作品の読者に救いをもたらすような新たな傾向が見られることについて考察した。

この研究項目では、一種のコミュニケーション現象として俳句文化を再評価した。つまり、何らかの文化現象について考察する際に、作品のみならずそれをとりまく環境も考慮に入れるのである。この研究観点は、社会情報学と呼ばれる人文社会系の研究領域に深く関連しているアプローチである。

ここで申請者が注目したのは作品にとって内在的な「環境」であり、それは作品が包含する「外部」と言うべきものである。くわしくはつぎの三つに大別される。

第一に、俳句という詩の「外部」としての散文であり、また日常的なデータである。マイクロ・ポエトリーには、たとえばウィキペディアや新聞の記述やツイッター上のつぶやきを再構成して作られる「偶然俳句」や「偶然短歌」も含まれている。これらは、私たちをとりまくごく普通の散文に詩を見出す実践であると評価できるだろう。私たちの存在自体が管理可能なデータに単純化される日常のなかで、データを詩化して複雑性を回復しようとする意義は大きい。

第二に、作品における主体の「外部」としての客体である。メインの観察視点の「外部」である、別の観察視点といってもよい。たとえば、俳句に詠み込まれた季語としての対象物が、作者の心情の象徴のように働くことは少なくない。そこでは、作者と対象物とがあたかも成り代わるように呼応しており、このような表現観点の変換が、俳句の魅力をかたちづくる特質の一つとなっている。またこの点は、外国語のマイクロ・ポエトリーにも共通していることが多い。

第三に、作品に表現されたことの「外部」としての省略部分、つまり余白である。ここでいう省略は、俳句やマイクロ・ポエトリーの極端に短い形式だけではなく、その特徴的な内容にも関係している。たとえばsix-words memoirsと呼ばれるマイクロ・ポエトリーには人生における悲しみや失敗などが非常に多くとりあげられている。普段の生活では口にしにくいマイナスの内容をあえて表現することで、悲喜こもごもの人生の全体性を回復させるような逆説的な詩の効果がみられる。

以上のような三つの「環境」を考慮することで、俳句やマイクロ・ポエトリーについて、多面的かつ統合的な理解が可能になるだけでなく、両者を一貫した観点から評価す

る可能性がひらける。

●ケアと自己実現

現代でも、俳句は挨拶としての機能を有している。読者と作者とがそれぞれ、相手の立場に立って考える「ケア」という分析観点によって、俳句を通じた自己実現について考察する。

その際、作品内において表現の観点の変更に注目した。なぜなら俳句は、二つの詩句の配合構造に端的にあらわれているように、表現や観察の観点の変更を大きな特徴の一つとしていると言うことができるからだ。

ミルトン・メイヤロフによるケアの理論を参考にしつつ、俳句を介したケアと自己実現の関係について、作品に即して考えた。

ただし本研究項目についてはさらなる分析が必要である。

研究の成果をいかに発表したか

・『Constructivist Foundations』に向けた論文として執筆中（とりわけ、俳句を介したケアと自己実現にかんする部分にかんして）。

・社会情報学会誌上における研究発表報告書の掲載。なお、報告書の直接の題材としたのは2015年に行われたシンポジウムの内容だが、貴研究費を得たことにより、報告書をまとめるのに際してマイクロ・ポエトリーに対するさらなる考察を行うことができ、報告書の内容をアップデートすることができた。本項目内での成果報告は、社会情報学会誌上の研究発表報告書に一部即するものだが、それはこのような事情による。なお、貴研究費によっていかにマイクロ・ポエトリーをめぐる研究が進捗したかというと、上記のような、作品にとっての環境や外部という観点から、2015年の発表を再評価できたことである。